

# 微笑む似非紳士と純情娘 3

*U r a r a & B y a k u y a*

---

月城うさぎ

*Usagi Tsukishiro*



## 目次

微笑む似非紳士と純情娘 3

白夜様の休日

旅先での出会い

書き下ろし番外編 幸せの足音

微笑む似非紳士と純情娘

3

# 第一章 薰色片想い

## 〈予期せぬ展開〉

轟いた銃声、そしてバラバラと落ちて私の足元に散らばるシャンデリアの破片。

ドクン、ドクンと心臓が早鐘を打つてゐる。

私、一ノ瀬麗は従兄の聖君が開発した青い薔薇のお披露目パーティーで、テロ事件なんて非日常に巻き込まれてしまった。

テロの目的は、青い薔薇——と思いまや、実はその薔薇から作ることができるという危険な薬と、さらには不可思議な能力をもつ私たち“古紫”一族の血にまつわるデータだつた。そのことを知つて、テロリスト集団となんとか対峙していた私だつたが……ただいま危機的状況は、絶賛継続中である。

今、私は身じろぎひとつできずにいる。何せ、拳銃を突きつけられているのだ。

そんな私を見ながら、テロリストのボスが非情な宣告を下した。その女を捕らえろ、と。指でぱちんと合図をした直後、黒尽くめの男たちが一斉に武器を構え直す。

ちょ、ちょっと待つて！ これってかなりやばくない？

じりつと、一步後退した。

後ろを見せたら撃たれる。そう本能的に察して、逃げ出すこともできない。

捕まえろと命令を受けた数名の手下が、銃を構えて私にゆっくりと向かつてくる。か弱い女の子に対してそんなに大勢の男が動くか、普通？ この卑怯者ども！！

「逃げなさい麗！」

聖君の必死な声が聞こえた。

自分だって両隣から敵に武器を突きつけられて動けないのに、私を案じて逃げろと言つてゐる。

近付いてくる彼等と聖君の顔を交互に見つめながら、私は必死に考えた。

ここでの最善の策は、一体何だ！

男のひとりが私に銃を向ける。脅しのつもりだろうけど、今はその確信がもてない。そして情けないことに、足が地面に埋まつたかのように硬直して動けないのでだ。

全身汗でびつしより。さつきみたいに、テロリストに対して一説ぶつような強がりを見せる余裕なんて、一切ない。

だけど、そんな状況でも、隣に座っているK君のことが気になつた。K君は今をときめくビジュアル系バンド、Addict<sup>アディクト</sup>のボーカルだ。人質が解放されるという絶好のチャンスに何故か出て行かず、私に付き合つてこの場に残つたのだ。完全に巻き込まれた、というところだろう。

でも、今テロリストにとつてのターゲットは、私のはず。テロリストの狙いが『古紫』にあるとわかっているのだから、K君のことは見逃してくれるんじや……？

「K……K君、逃げて」

彼は、傍観者のように、ただ座つて状況を眺めている。そして、私の言葉に対しても、肝が据わつているのか諦めているのかわからない口ぶりで、「そんなことができるわけないでしょ」とあっさり言つた。

「女の子ひとりで頑張らせて、拳句<sup>あげく</sup>に守られる俺つて、どんなだけ情けない男なの。麗が捕まるなら、俺も一緒に捕まるよ。格闘技とかはできないけど、庇うくらいはできるはず。それにひとりで逃げだしたりしたら、ファンの子から幻滅されるしね」

マイペースな口調でそう言つて、私を紫色の瞳で見上げてきた。パニックにならず、客観的に物事を見ていて、とても冷静だ。

そのクールな眼差しに、私の焦りも次第に落ち着いてきた。

「ご、ごめんね、K君……。でも何か今の台詞<sup>せりふ</sup>、かつこよかつた。ちょっとときめいたよ！」

こんな場面であんなこと言えるなんて！

どこか達観していて、落ち着いてる彼を見ていると、次第に恐怖が薄まってきた。K君つて、私より年下じゃなかつたつけ？ 以前なんとなく見た音楽雑誌にのつていた情報を、うつすらと思い出す。

うーん、この落ち着きっぷり。実は年齢<sup>年齢</sup>詐称<sup>さしう</sup>しているんじや……

「失礼だね、してないよ年齢詐称なんて」

「つ！ 今、私の心読んだ!?」

「麗は考えることが顔に出るからわかりやすい。俺はプロフィール通り、一三歳だよ」二歳年下だったのか。

「これが終わつたら、何かいい詩が作れそうな気がする」

ほそりとK君が呟いた。

Addictの曲は、歌詞のほとんどを彼が担当しているという。そのせいか、こんな状況下でそんなことまで考え方られるなんて。余裕のある君は大物だよ。

「うん、その時はCD送つて。だから、お互い無傷でここから出よう」

視線は決してテロリストから逸らさず、私はK君と雑談混じりの会話をした。そのおかげで、かなり冷静さを取り戻せた。

焦つたらだめ。パニックになんてなつたら、その時点で死ぬ確率が跳ね上がる。

今は、おとなしく彼等の言うことに従う方が……

「……」ロープを持つている。

「つてどつから出してきたのそれ！　さっきまでなかつたよね？！」

間合いがどんどん詰められて、一番近くに来た敵との距離は、およそ三メートル。この距離で撃たれたら、確実に命中だ。ロープを持つて近づいてくる彼等を睨みつけながら、唾を呑み込む。

「やばい、もう駄目かも……!!」

その瞬間。示し合させたように動くものが見え、私は目を瞠つた。

目の前で展開された、予想外の光景——

「麗、あれ」

K君が指で示した方にゆっくりと顔を向ける。私は驚愕のあまり、思わず口を開けた。

「お前ら。一体どういうつもりだ」

低く地を這うようなテロリストのボスの声が届く。

彼がそう言うのも無理はない。

私たちに向かっていたはずの黒尽くめの男たちが、何故か一斉にボスに銃を向けてい

たのだ。椅子に座るボスの周りをぐるりと囲み、拳銃やマシンガンを彼の頭に突きつけている。そして、ロープを持っていた男がボスを縛り上げようとしていた。

テロリストは、ボスを合わせて十三名いたはず。そのうちの一人は、私の弟の響と、バイトと思って巻き込まれてしまつたという、ちょっとおマヌケな森田さんだ。今、ボスを囲む輪に加わっていないのが四人いる。それ以外の全員が、ボスに反旗を翻したのだ。呆然としてその光景を眺めている私とK君、そして聖君をよそに、仲間のひとりが目出し帽を脱いだ。

「……簡単だ。お前が仲間だと思っていた男たちが、入れ替わつただけのことだ」

現れた顔を見て、思わず「あ！」と声が出た。

「あれ？　あの人って柔道のオリンピック選手じゃなかつたっけ？　あ、もうとつくて引退したか？」

K君の言葉につられてうなづく。

その逞しい身体には、衰えなんてどこにも見当たらない。引退して何年か経つけど、未だに鍛え続けているであろうその人は、まさしく数年前のオリンピックメダリスト。

そして次々と目出し帽を取つて正体をさらし始めた男たちを見て、私は信じられない思いで立ちすくんだ。

だつてそこにいたのは全員、このパーティーに招待されていた人物で——

「ど、どーゆーこと……?」

「脱力しそうになるのを堪えて、ぽつりと呟いた。

「さあ、見たまんなんじやない?」

「どこか意地悪そうに笑ったK君の顔を見て、瞬時に悟る。

「もしかして、このこと知つてたの? だからそんなに余裕だつたの!?

「うん。味方に入れ替わってるってことはね」

「悪いれた様子もなく、彼はあつさりとうなずいた。

「だつてこんな面白そうな場面、自分の目でちゃんと見たいじゃん」

映画みたいなシーンを生で眺められるなんて滅多にない、とでも言いたげな表情に、思わず深いため息が零れた。

K君に対する見方が少し変わってしまった。

「別に嘘ではないけどね」

「だから、人の心を勝手に読まないで!!」

輪に加わっていなかつた四人のうちの二人も、帽子を脱いだ。ひとりは響で、もうひ

とりがおそらく森田さんだろう。

残された二人は戦意を喪失したのか、呆然としたように動かずに、立ち尽くしている。

「響! ちょっとどうなつてるの!?」

近付いてきた弟に尋ねると、響は少し緊張が解けた顔で微笑んだ。

「うん。麗ちゃんがやつたことをね、森田さんに協力してもらつてやつてみたんだ。さつきみんながトイレに行つた時に、見張りをしていたテロリストたちと入れ替わつたんだよ」

どうやら男性トイレには、ご丁寧に二人の見張りをつけていたらしい。森田さんがテロリストたちに、男性は体力があるから見張りの数を増やして欲しいと言つてみたら、ひとりが一緒に来てくれたそうだ。

そして隙を見て森田さんが相手を气絶させ、トイレに来ていた人に協力を仰いだ。

招待客の誰かがトイレに行くたびに、テロリストに見張りの交代を依頼したという。次々と、味方には加わらない敵を昏倒させ、身ぐるみを剥いで、彼等のフリをしてずっとこの会場に潜伏。何とも大胆で、そして危険と隣り合わせの作戦である。

ちなみに捕まえたテロリストたちは、未だにトイレにいるらしい。おそらくロープか何かで身動きがとれなくなっているのだろう。

響から一部始終を聞いて、一瞬言葉を失つた。まさかそんなことをしていたなん

て……！

「助かつたからよかつたけど、なんて危ない真似を……！」

「え、それを麗ちゃんが言つちゃう？」

うつ、それを言われると痛い……

気づくとボスは武器を奪われた上、ロープで縛り上げられていた。

それを見て、少し氣を抜いたその瞬間、テロリストのひとりが、いきなり出口に突進してきた。そう、戦意喪失をした二人のうちのひとり。そして彼が向かってきたのは、私の後ろにあるドア！

「どけーーーー！！」

体格のいい男が拳<sup>こぶ</sup>を振り回して叫びながら、私の方へ激走してくる。

咄嗟に響の背中を突き飛ばして、遠ざける。

だがその一瞬で、問合いを詰められてしまった。

覚悟を決めて迎え撃とうと、身体にぐつと力を込めたその時——

「えい」

小さな掛け声とともに、K君が絶妙のタイミングで足を出した。

目の前しか見ていなかつた男は、その目論見<sup>もくろみ</sup>にまんまと引っかかつた。K君の足につまずき、スローモーションのように目の前で男が倒れていく。

思わず、倒れゆく男にタイミングを合わせて、私はその肩に右足を振り下ろした。ガン！

男は、そのまま床に倒れこんだ。

私はさらりに、その男の左肩<sup>さげん</sup>を踏みつける。

「うわ、麗……。ヒールで踵落<sup>かかとおち</sup>としとか、容赦ないね」

「っ！ ち、ちがつ……！ 今のは咄嗟に足が出ちゃつて!!」

踵落としをするつもりはなかつたんだよ！ K君の言葉に、私は慌てて反論した。

それに、頭を狙わなかつただけありがたく思つて欲しい。

呻<sup>うめ</sup>き声が聞こえたが、そのまま大人しくなつた。

「スリットが入つて、足が上げやすいのはわかるよ。でも、ドレスのまま足を上げるなんてはしたない真似、レディが男の前でしちやダメだよ。ビリッて音したけど、丈夫埃<sup>ほり</sup>まみれになつたり、裾<sup>すそ</sup>を焦<sup>こ</sup>がしたり、スリットが破れたり……散々な目に遭つてい夫？」

「え？ 嘘！ あ、ああ……！ 破れた……」

膝上五センチ程度だつたスリットが、今では太ももの真ん中あたりまでになつていて、

埃まみれになつたり、裾を焦がしたり、スリットが破れたり……散々な目に遭つてい

るこのドレス。いくらクリーニングに出しても、もう着られないなあ。

諦めのため息をついたところで、K君が再び話しかけてきた。その声はさつきまでの冷静なものではなくて、どことなく悪戯を思いついた子供のように弾んでいる。

その予想通り――

「ね、麗。そのままさ、女王様っぽい台詞、言つてみて」  
せりふ

「は？ 何それ、嫌だよ！ 何で私が！」

「いいじやん。今ぴつたりだし。男を踏みつけにしてるんだから、似合うと思うよ」

これは、したくてやっているわけじゃない！

この足をどかしたら、この人また暴れるかも知れないじやん!!

でも完全に面白がっているK君は、私の拒否などきれいに無視だ。

「頭かしらが高い。地面に這はい蹲くんな、この豚男ぶけやつ」とかどう?」

な、なんて台詞を……!!

でもどこかワクワクしているK君の顔を見ていると、ある意味彼にはお世話になつたし、これくらいたいしたことじやないかな、つて思えてくるから不思議だ。

それにもしかしたら、彼はアーティストとして、何かのインスピレーションを得ようとしているのかも？

数秒ふそく唸のり続けて考えた後――

「一度だけだよ?」と念を押した。

こつくりとうなずきつつ目を細めて笑うK君を見つめて、私はため息をついた。

何度も息を吸つてはいて、呼吸を整える。

そうして、おもむろに右手を腰に当て、男を見下ろしながら、侮蔑ぶべつが混じった口調で声高に言い放つ。

「頭が高い。地面に這い蹲んなさい、この豚男!」

ふう、コレで満足か！

じわじわとわきあがる羞恥しゅうちに、顔が赤面し始める。火照ほてる顔でK君を見たら、彼は一

言「あ」とだけ呟つぶやき、私の後ろに視線を向いた。

つられるように、私も振り返ると……

いつの間にか開け放たれている、両開きの扉。

扉の横には、まだ若そうな刑事っぽい印象の男性が、控えめに立っている。何か悪いものでも見たかのよう、気まずい表情を浮かべて。バツチリ合つた視線は、速攻で逸

らされた。

しかし！ そんな見知らぬ刑事さんなんて、今はどうでもいい。

扉を開けたであろうその人は、まっすぐに私を見つめている。畠然あぜんとした顔で、私と、私が足蹴あしげにしている人物を凝視していた。

自分の顔から血の気が引いていくのがわかつた。

先ほどの顔の火照りはどこへやら。一気に顔面蒼白。

「と、ととと、東条さん……！」

「え、どれが？」と、平然と尋ねてくるK君は完全に無視。気絶したい衝動が身体中を駆け巡った。

K君の口車に乗せられて、平常時には絶対できない行為を、現在進行形でやっている自分。

穴に埋まりたいほど恥ずかしい。

あんなに会いたいと願っていた人物に思いがけず会えたことは嬉しい。が、それも時と場合によるもので。この状況では全く喜べない。

一体どうして、このタイミングで現れるんですか、東条さん！！



聞こえてきた銃声に、血の気が引いた。

ドクン、と心臓が嫌な音をたてて跳ねる。

次々に浮かぶ悪夢のような光景を、脳内から必死で打ち消す。

違う。彼女じゃない。銃声がしたからといって、誰かが撃たれたとは限らない。威嚇のための発砲かもしれない。

だが、冷静さを保とうとすればするほど、嫌な想像が絶え間なくわき上がり、自分を追い詰めていく。早鐘を打つ心臓が痛い。手足の血の気が引いていく感覚に、呑み込まれそうになる。

うつすらとかいていた汗が、急激に冷えていった。  
白夜は冷たくなった手の甲で額の汗をぐいっとぬぐい、硬直していた身体を意志の力で再び動かした。

早くこの目で彼女の安否を、確かめなければ。  
再び駆け出そうと一步踏み出した瞬間、誰かが後ろから白夜の手首をがっしりと掴んだ。

「待ってください！　このまま乗り込む気ですか？！　死にますよ！」

肩で息をしながら自分の手首を握るのは、自分より若そうな刑事だ。白夜の手首を掴んだまま、彼は小さく「やつと追いついた……」と呟いた。

扉から、次々と刑事が姿を現す。先ほどの銃声が聞こえていたのだろう。彼等は皆、拳銃を構えている。  
少し年かさの刑事が、一步進み出て白夜と向き合った。

「東条さん、あなたのこととは古紫から聞きました。事情はお察しします。ですが、ここから先は危険です。我々が動くまで、あなたは大人しく待っていてください」「嫌です」

間髪をいれずに即答した。

白夜のこの返答に、周囲の反応が遅れる。

「いや、それは困るのですが」「もう散々待たされたというのに、まだ待てと仰るのですか。そもそもあなたたちが早く来ていれば、私の麗さんが無茶をすることもなかつたのですよ？ 愛する女性が捕らわれているのに、ただじつと黙つて待つていろと？」

刑事にまっすぐに視線を向け、白夜は静かな聲音で問う。落ち着きを保ちつつも糾弾するその様子に、刑事は思わず声を詰まらせた。

白夜とて、彼等が相当やきもきしながら出動命令が出るのを待つていたことはわかつてゐる。警察の組織が複雑で、それでも早期解決に向けて頑張つてくれていたことは、麗の従兄いとこであり、警視庁の管理官である隼人はやとからも聞いていた。

しかし、抑えきれない衝動と不安を抱えたまま、じつとこの場で待つなんて耐えられない。

せめて状況を確認したい。邪魔をする気などない。だから、自分も同行させてほしい。その想いが伝わったのだろうか――

白夜を引き留めたその年かさの刑事が、諦めの混じつた表情を浮かべつつ、微かにうなずいた。

おそらく、隼人から何か言われていたのだろう。渋々ながらの了承だった。

白夜は一言「感謝します」と伝え、会場へ向かう彼等の後を追つた。

しんと静まり返つていた最上階に緊張が走る。会場付近まで慎重に近づくと、唐突に室内が騒がしくなつたことに気づいた。

突如、男の獣けものじみた雄叫おなげびが、扉の外にまで響いてきた。思わず白夜は衝動のまま動いた。刑事たちの抑止の声は一步遅く、両開きの扉が白夜の手により開かれる。

「麗さんっ!!」

視界に飛び込んできたのは、真紅のドレスを纏つた若い女性の後ろ姿。そしておそらく叫びをあげたであろう男が、つまずく姿。

その肩をめがけて、女性が踵落かかとおちとしを食らわせた。スリットから覗く足は、一度高く上げられてから一気に振り下ろされ、止めのように男の動きを封じた。白夜の後に続いた刑事たちの目が釘付けになる。

髪は乱れ、纏うドレスは遠目から見てもボロボロだ。だが、一体何があつたのかと推測するよりも、目の前の光景が衝撃的すぎて……。一同はしばし嘔然としていた。

その後ろ姿だけで白夜は彼女の正体がわかつたが、どうやら彼女はまだ、こちらに気づいていないらしい。

白夜は荒い呼吸を整えながら、じっと麗の後ろ姿に視線を注いだ。

——無事だ。彼女は、生きている。

震えながら怯えて泣くような、か弱さや儚さとはかけ離れた女性。

芯が強く勇ましく、毅然とした後ろ姿からは、微塵も弱さを感じさせない。

だが、だからといって彼女が平氣だとは、白夜は思っていない。

駆け寄りたい。怪我がないか、今すぐ確かめたい。

自分の胸の中に彼女を閉じ込め、生きている温もりを感じさせてほしい。そして——  
気丈に振る舞い、ぴんと張りつめている糸を緩めさせて、思いつきり勞わってやりたい。

もう、我慢はしない。たとえ彼女に嫌がられようと、感情の赴くままに抱きしめる。

そう思つた時、麗らしくない発言が聞こえてきた。だが、それすら愛おしく感じる。

内容についてどうこう思うよりも、元気そうな声が嬉しかった。この際、言つていた

台詞はどうでもいい。むしろ踏みつけられている男が気に食わない。

踏みつけられたい願望があるわけじゃない。が、動きを封じてはいるだけだとしても、

間接的に麗と接触している男に対して殺意が芽生える。

今すぐ離れる、と。

ここで、麗の近くにいた青年が、白夜に気づいた。その青年につられるように、麗が振り返る。すると、少し赤面していた彼女の顔から、みるみる血の気が引いていった。その様子を訝しく思いつつも、ようやく顔を真正面からしっかりと見ることができて安心する。

驚愕の色を浮かべる麗を早くその男から遠ざけたくて、彼女が生きている証を直に感じたくて。白夜は麗を見つめながら、彼女に近づいた。

### 〈募る恋心〉

ぞろぞろと、テレビのドラマで見かけるような厳めしい刑事さんたちが扉から入ってきて、一気に会場内は騒がしくなった。

先ほど解放された人質たちから、ある程度事情を聞かされていたのだろう。彼らがこの状況に困惑しているようには見えなかつた。——まあ、多少は驚いていたようだつたけど。何せ、助けに来たはずなのに、既に敵の親玉がロープでぐるぐる巻きにされて

いるなんて、さすがに予想していなかつたらしい。

しかし、今の私には、冷静に刑事さんたちの様子を眺める余裕も、彼等の心理状態を分析する余裕もなかつた。

東条さんから、視線が外せない。

私が動搖していることは、きっとバレバレだろう。

血の気が引いて青ざめたまま、私はごくりと唾を呑み込んだ。

一体何故、こんなタイミングで……！

ちらりと目線を落として自分のドレスを確認する。何度見ても、やっぱりボロボロだ。メイクだってほとんど落ちているだろうし、髪もアップにしていたのが解けているから、ボサボサ。先ほどトイレでさつと整えたけど、そんなのは焼け石に水だ。

こんな姿で、しかも豚男なんて言つて男を踏みつけにしている状態で。一体何をどう取り繕えばいいのだろう。絶対に何か変な誤解をされているはず。

この状況で、どんな顔して東条さんと会えと!?

冷や汗を流しながら思わず周りを見回す。誰もが忙しそうで、私たちのことなんか気にも留めていない。

その中でK君、そして響と目があった。響は若干氣の毒そうに視線を泳がせてゐるから、まあ、よしとして。面白そうな顔で傍観しているK君。後で覚えていなさいよねー!!

前から感じる強い視線に、私はゆっくりと顔を戻す。

いつもの穏やかで優しい表情からは想像ができないほど、東条さんは不機嫌でするどい空氣を纏っている。柔軟な微笑なんて浮かべていないし、珍しく眉だつて顰めている。張りつめた空氣の中、彼はこちらに向かってまつすぐに歩いてきた。

一步、一步、私だけを見て近づいて来る姿に、胸が焦がれると同時に、焦りが募つていく。東条さんが相当怒つていることは、「一目瞭然だ。危ないことはするなど言われたのに無茶をしたから、呆れているのかもしれない」。

不安がわき上がりてくる。

嫌われたらどうしよう、呆れられたらどうしよう。約束を守らず、突つ走つたことを軽蔑されちゃつたらどうしよう——

目の前まで来た東条さんは、二歩ほど離れた場所で立ち止まり、私を見下ろした。直後、私の肘をぐいっと引っ張つて、足蹴にしたままだつた男から私を引きはがした。直を握りしめた。

次から次へと、負の思考が頭の中を駆け巡る。ギュッと爪が食い込むくらい、強く手を握りしめた。

目の前まで来た東条さんは、二歩ほど離れた場所で立ち止まり、私を見下ろした。直後、私の肘をぐいっと引っ張つて、足蹴にしたままだつた男から私を引きはがした。直氣づいた時には、嗅ぎなれた匂いと、よく知る温もりに包まれていた。

小さく零れた吐息が耳に届く。

「心配、しました……。」

掠れた声で、耳元で囁かれる。ギュッと心臓が握られたように苦しくなった。

息苦しくなるほど強く抱きしめてくる東条さん。その背中に腕を回す。じわり、と胸

に温かい何かが染み渡つていった。

もうこれで何度目になるだろう。この胸に抱かれて安心するのは。

自分の気持ちに気づく前から、幾度も東条さんの温もりに安堵を覚えていた。単に癪いやをし効果が高いだけじゃない。嫌悪感を抱くどころか、むしろ好意的に思えていた時点で、私はきっと東条さんに惹かれていたのだろう。

彼の匂いで心が落ち着いて、ようやく会えた実感がわいてくる。

ぎゅっとしがみつく腕に力を込めて、ぐしゃぐしゃな顔が東条さんのスーツにくつつくことも構わず、私は彼に思いつき抱き着いた。

「心配かけて、ごめんなさい」

かほそい声で謝ると、抱きしめている腕の力が強まつた。まるで私が生きているのを確かめているかのように。

しばらく抱きしめられたままになつていると、東条さんがようやく腕を緩めた。私も彼の背中に回していた腕を下ろす。

身体を離すと同時に、東条さんの片手が、私の頬に添えられた。そして、そつと上を向かされる。東条さんの手の温もりが直に伝わってきてどぎまざする。間近に彼の麗し

い顔がドアップで映つて、呼吸を忘れてしまいそうだ。

髪と同様に黒くて直毛の睫毛まつげ。それが一本一本まで見えるような近さ。至近距離で見つめられて、びくりと肩が震える。

恋心を自覚したばかりの私の顔は、思いつきり火を噴いているはず！  
あの、今気づいたんだけど。こんな間近で見られたら、化粧が崩れている悲惨な私の顔、毛穴まで全部見られちゃっているんじゃ！？

途端に乙女心が発動した。今はそんなにじっくり人の顔を覗いちやダメですよ、東条さん！

私の乙女心に気づいているのかいないのか——東条さんは、妙な羞恥心じゅうちしんに襲われている私をじっと見つめながら、指でつと頬の輪郭をなぞつた。私は反射的に、ぎゅっと目を瞑る。

彼は、艶めく声で、「怪我はありませんか」と尋ねてきた。

「な、ななな、ないであります！」

動搖のあまり、不自然なほど声が裏返つた。日本語も変だし！

ああもう、忘れた頃に体温が上昇して、再びあの不整脈が……！  
いい加減にしないと心臓が壊れてしまう。顔を背けたい気持ちでいっぱいだけど、でも東条さんから離れるのは嫌だと心が訴えてくる。

けれど離れなければずっとこのドキドキは続くわけで。それは精神的にもいろいろと負担が大きいわけで！

恋は何て厄介なんだ！

初めて自覚した恋心に、私は戸惑いを隠せない。

困惑と嬉しさ。相反する心が同居する。でも、その恥ずかしさやドキドキも嫌じやない。

二〇一九年五月

じつと私たちを観察して、ハタクシハK君ニ、声を掛けられた。

少し離れた場所で椅子に座っている。マイペースな猫のように窓の外を覗く。彼は目を細めながら、くすりと微笑んだ。

K君の隣では、響が視線を彷徨わせつつ、頬を染めている。どうやら目のやり場に困っているらしい。私は慌てて、東条さんに腕の拘束を解いてもらつた。お姉ちゃんも気恥ずかしさでいっぱいだよ。

けれど、何か思いついたようにK君は立ち止まり、振り返った。

今度会った時は、『てんとう虫のサンバ』を俺の魅惑ボイスで歌

か二た 従が見たか二た舞台は絶れ二たのかみ

けれど何か思つていてK君は立ち止まり

口角を上げて不敵に笑ったK君。そして踵<sup>きびす</sup>を返し、後ろ姿のままひらりと手を振つて外に出ていく。

その曲がどんな曲なのかわからなくて、私は首を傾げながらも「ありがとう?」と彼の背中に向かって言った。

大人気ビジュアル系バンド、AddiCtのボーカルのK君が、特別にあの魅惑ボイスで私のために歌つてくれるなら、ありがたく頂戴しておこう。たとえそれがどんな曲であつても。

卷之三

「君たち、無事だつたかい!?」

響と一緒に聖君の抱擁を受ける。ギュッと抱きしめてくる聖君は、じんわり涙目だつた  
「何て危ない真似をするんだ、二人とも！」運がよかつたから無事だつたけど、こんな  
危険な真似は二度としちゃダメだからね!?」

いや、こんな危険な事件に遭遇することはそうそうないだろうし、もう一度と起こつてほしくない。

人生で一度あれば十分というか、いやむしろ一度もない方がよかつたよ。こんな事件に何度も巻きこまれるとか、ありえない。どんだけ波乱万丈な人生なんだ。映画じやないんだから。

「聖君こそ大丈夫？　どこか怪我けがしてない？」

遠慮なくギューギュ抱きしめてくる聖君に潰されそうになりつつも、聞いてみる。聖君は私たちをようやく熱い抱擁から解放してくれた後、ずれた眼鏡を直して「かり傷程度だから大丈夫」とうなずいた。よく見たら頬にうつすらと傷が……

「つて、それナイフで切られたの!?」

血は止まっているけど、脅しでナイフを突きつけられていただけではなかつたのか。おのれ、許すまじ……。聖君の整った顔に痕あとが残つたらどうしてくれるんだ。

沸々と怒りがわいてくる私と違つて、聖君は何ともないような顔で微笑んだ。

「大した傷じやないから、大丈夫だよ」

気にしないで、と頭を撫でられて、思わず涙がこぼれそうになる。この優しい温もりが失われなくてよかつた。改めてそう思った。

次々と広間に乗り込んできた刑事さんたちは、手際よくテロ集団を拘束していくた。真つ先に捕らわれたのは、既に身動きが取れないほど頑丈に縛られていたボスだ。マスクを外した顔を改めて眺めてみる。四十歳くらいだろうか？ もしかしたら三十代かもしれない。

聖君とあまり歳が変わらない印象の男が浮かべる表情は、全てを諦めたものでも、怒

りに満ちたものでもなかつた。生氣を感じさせない虚ろな瞳を見て、私の背筋にぞくりと震えが走つた。感情の一切をそぎ落としたその表情が恐ろしい。

——あれが、うちの一族に恨みを抱き続けてきた、冷徹な男なのか。

近くにいた刑事さんに聞くと、男性トイレに捕まえていたテロリストの仲間たちは、すでに拘束したという。そして、人質に混じつて逃走をはかつた共犯者の男も、身柄を拘束したらしい。警視庁のエリート管理官で隼人君の同僚、桜田さんから得た情報をもとに、隼人君がその男を見つけたそうだ。

気がかりだったことが解消して、私はほつと安堵のため息をついた。

そうして、とりあえず私たちも今日は一度帰つていいと、刑事さんからお許しがでた。聖君が響を誘つて、二人が一緒に下に向かつた。それを見ながら、私も東条さんと並んで非常階段を下りる。まだ、エレベーターは点検中だ。

隣を歩く東条さんの腕を支えに、かつん、かつんと音を鳴らして階段を下りる。

「大丈夫ですか？」

いつもの優しく穏やかなその声だけで、私の心臓が大きく跳ねた。

もう、どこまで反応する気なの、この身体は！

「だ、大丈夫です！」

階段を下りきつて非常階段の扉を開けると、東条さんは私の肩ではなく、腰に手を回

した。さりげなく自然なその手つきは、勞<sup>いた</sup>わりに満ちている。もつと自分に寄りかかっていいということなのかもしれないけれど、突然こんなことをされるとひどく戸惑ってしまう。

え、ええっと！ ど、どうしよう。近い、近いんですけど!? つてか何で肩じやなくて腰!? 今まで肩は抱かれたことがあつたけど、腰つてあつたっけ!?

私を気遣ってくれているのだろうか。東条さんの真意がわからない。  
もしかして寒そ<sup>う</sup>だから暖めてくれるつもりとか?

それはそれで少し嬉しい気もするけど、ダメだ。心臓<sup>みの</sup>がもたない……

「あ、あの東条さん……歩きにくくな<sup>ります</sup>ですか?」

遠慮がちに尋ねてみると、隣で歩く東条さんは見惚れるほどきれいな顔で、私に微笑みかけた。

「いえ、全く。むしろ、できるならあなたを抱きかかえて歩きたいくらいですよ」

——疲れているでしよう?

そう続いた言葉に、ぶんぶんと勢いよく首を左右に振る。そんな羞恥<sup>しゆうち</sup>プレイ、勘弁してください！ 疲れていると言ったが最後、フェミニストの東条さんは、マジで行動に移すに違いない。言葉に気をつけなければ。

お姉様抱っこは乙女の夢だ。もちろん憧れるけど、好きな人に抱き上げられる時に重いなんて思われたら……相当なダメージを受けてしまう。乙女の夢はダイエットに成功してから、是非、機会があつた時に改めてお願<sup>ね</sup>いしたいかも……  
つてちょっと待つた！ まだ恋人同士でもないので、私の一方通行の片想いなのに、何図々しいこと考<sup>か</sup>えているんだ！

思わずちらりと隣を見上げると、私の視線に気づいた東条さんが麗<sup>うるわ</sup>しく微笑んだ。惚<sup>ほ</sup>けそうになるのを堪<sup>こら</sup>えて、顔の筋肉を引き締めつつ前を見る。

ああ、ダメだ。かつこいい……!!

ふと見せられる笑みに、トキメキが止まらない。胸<sup>むね</sup>がきゅ~と締め付けられてしまう。東条さんがかつこいいのは前からだけど、何故か今まで以上に素敵に見える。これが恋する女の子が持つ乙女フィルターみたいな！? 好きな人は何割増しかでかつこよく見えちゃうっていう、恋のマジックなの!?

普段から美形で、スタイルよくて、非の打ちどころのない人が、もつと輝いて見えるなんて。恋の力は本当に恐ろしい。心<sup>こころ</sup>なし<sup>か</sup>東条さんの周りがキラキラ光っているみた<sup>い</sup>。つて、それ何の特殊効果なの。眩<sup>まぶ</sup>しさで目が焼けたら困るんですが……  
俯<sup>うつ</sup>き加減で内心悶<sup>もだ</sup>えながらエレベーターを待つ。私は無言のまま、胸の鼓動が東条さんに聞かれたらどうしようなんて考えていた。甘<sup>あま</sup>さを孕<sup>はら</sup>んだ空氣を微<sup>すこ</sup>かに感じなが

## &lt;告白への一步&gt;

エレベーターで一階に降りると、ガラス一枚隔てた向こう側から、先ほどまではなかつた騒がしい人の気配が漂ってきた。

外につながる正面ドアの向こうは、予想以上に人であふれている。報道陣や警察関係者、そしておそらくこのホテルの宿泊客や従業員などなど。

そろそろ夜中の十二時をまわろうかという時間なのに、そんなことは全然おかまいなしだ。

ちらりと外を窺つて、あの中を突つ切つて外に出るのは自殺行為に等しいと判断した。想像しただけでげんなりしてしまう。

だつて私たちが出たとするよ？ そしたら、マスコミの人たちからすれば、出てきた二人のうちひとりは人質――多分バレてはいないと思うけど、暴れまくった本人、もうひとりは東条グループの御曹司で美形の若手社長。話題性たっぷり。囮まれないわけがない。

私はまあ、顔が知られているわけではないから、適当にぱぱっと逃げ切れると思う。けど、東条さんはそうはいかないだろう。だつて彼は経済誌とかに時々写真を掲載されているから、マスコミには彼の顔を知っている人も多いはずだ。さらには東条さんのことを何も知らない人が見ても、彼は人目を惹くイケメンなのだ。こんな逸材、彼等がほつとくわけがない。

隠しきれない存在感つて、こんな時厄介だなと感じてしまった。  
かつこいい人には誰だつて目がいくものだ。それはわかる。非常によくわかる。でも。

正直言つて、東条さんが女性に囮まれてキヤーキヤー言われているのを想像すると、面白くない……。テレビになんて映つたら、東条さんファンがますます増えちゃうじやないの。そんなことを考えただけで、何だか胸の辺りがムカムカ、モヤモヤ？ してきた。もちろん、私にそんな自分勝手なことを言う権利がないのは、重々承知している。だから、この気持ちは、とりあえず自分の中に封印。

「麗さん。裏から出ますよ。こちらです」

こんなとこ、よく存知ですね、東条さん。

重い扉をゆっくりと開く。外からの冷たい風が、ぴゅうっと頬を撫でた。周囲に人がいないことにほつと胸を撫で下ろしていると、肩にふわりと東条さんのジャケットをかけられた。

「そのままだと風邪をひきますので」

確かにドレスと薄手のボレロだけなので、外に出た瞬間に肌寒さを感じていた。  
大きすぎてぶかぶかなそのジャケットは、暖かかった。そして東条さんの香りに包まれて、嬉しさが込み上げてくる。

頬が赤く染まりそうになるのを感じつつ、お礼を告げた。

「あ、ありがとうございます」

「いえ、麗さんのその姿は少々目に毒なので。他の人に見せる必要はありませんしね」

東条さんは優しく微笑んだ後、私の肩を抱いてホテルの正面側に向かった。  
風が冷たかつたけど、今はその冷たさが心地いい。肩を抱かれて密着している状態で、

私の顔が熱いから？

人気のない道を進み、私たちはホテルの正面玄関から少し離れた場所に辿り着いた。  
まだホテルの中には、私の職場の上司で従兄の鷹臣君や、隼人君、そして東条さんの

妹さんの朝姫さんが残っている。先に外へ出ているであろう響や聖君とも、合流したい。  
目立たない場所にひつそりと佇み、二人で、あふれかえる報道陣や警察官の動きをただじっと眺めていた。

こうやつて東条さんと密着して肩を抱かれていると、触れている部分がすごく熱いのがわかる。外気の寒さなんて気にならない。何だかドキドキして、身体が火照つてくる。  
どうしよう。東条さんを好きだと自覚して、次に会つたら絶対に気持ちを伝えると決めたんだっけ。

何も言わないまま会えなくなつたら絶対に嫌。だから会えたら気持ちを伝えようと。  
でも、気持ちに余裕が出てきた今――。このタイミングで告白するのは性急すぎると気がしてきた。

だつて、もし告白して振られたら……立ち直れない。

そもそも告白って、一度もしたことないんだよ！ 初恋が今なんだから当たり前だけど。

世の中の女の子は、こんなに緊張しながら好きな人に告白をするの？ それってすつ  
ごい勇者じゃない？

好きな人に気持ちを伝えるのは、もの凄い勇気と度胸がいるつてことを、私は初めて  
知った。

気持ちを伝えてもそれが相手に通じるとは限らない。その恐怖と不安に押しつぶされそうになりながらも、自分を奮い立たせて気持ちを伝える。たつた一言。簡単な言葉のはずなのに、感情が伴うと難しくなる。相手を好きになればなるほど、言葉が出てこなくなる。

うう、どうしよう……。いつ言おう。

まるでドラムを叩いているような激しさで、心臓がばくんばくん響く。と、不意に、好きな人に自分がどう思われているのかが気になつた。そういうえば私、東条さんはどう思われているんだろう？

嫌われてはいない、と思う。ここまで会いに来てくればし、いろいろよくしてくれること。優しく気遣つてくれて、甘やかしてくれて、辛い時は慰めてくれる。

普通相手が嫌いだつたら、そんなことはしないよね？ わざわざ忙しい自分の時間を割いてまで、嫌いな人間と一緒に居ようとは思わないよね？

東条さんはいつでも、私に優しい。

でも、彼が女性に優しいのはフェミニストだからだ。私に向ける甘い視線や言葉も、特別な意味がないって言われれば、確かにそうかもしれない。

だって、別に「好き」って言われたわけじゃないし……。

東条さんに「好きです」と告白する前に、「私のことどう思っていますか？」って訊

くべきなのだろうか。

というか、そもそも告白って、どういうタイミングでやるものなんだ？

ううん、と内心で唸っていたら。刑事さんの群れの中央にいた人物が、小走りで近付いてきた。その動きにつられるように、周囲の視線が一斉にこっちに集中する。

「見つけたぞ、麗！」

少し少年っぽさが残る声。そしてその声にふさわしい美少年顔。黒い髪が夜風になびく。だが明るい街灯に照らし出される顔には、その快活な声に反して濃い疲労の色が浮かんでいる。

それが何とも言えない優しさと色気を醸し出していて、周りの視線が一気にその美少年に釘付けになつた。

「あ、桜田さん！」

警視庁のアイドルにしてエリート管理官の、桜田笑。

容姿だけなら、間違いなく私より年下に見える。今年三十歳になつたとは全然思えない。手を大きく振つて駆け寄つて来た桜田さんは、いきなり私にがばりと抱き着いた。そしてすぐにはと手を離すと、両手で私の肩を掴み、心配顔と怒り顔を同時に披露した。そん、実に器用だ。

「無事か？ 怪我はないか!?」

「大丈夫だよ。ほら、かすり傷程度だし」

あんな無茶をしておきながら、かすり傷で済んだなんて、私って結構悪運が強いかも。でも匍匐前進なんてしゃつたから、きっと明日は筋肉痛やら何やらで動けないだろう。私に大きな怪我がないと確認した桜田さんは、ほーっと大きく息をついた。

その様子を見て、彼にも多大な心配と迷惑をかけてしまったことを改めて認識した。

「心配かけてごめんなさい。それから、いろいろありがとうございました」

「無事ならしいが……。いいか、麗。今日はかすり傷で済んだかもしれないが、あんな無謀なこと二度とするんじゃないぞ！ 明日みちりと事情聴取させてもらうからな！」

うげえ。事情聴取……

なんて気が重くなる単語！

その場には桜田さんだけじゃなく、隼人君もいるだろう。そして当然のように、鷹臣君が同席するはず。警察関係者じゃないのに、何故か鷹臣君がそこにいることを、私は確信できた。

さきっと鷹臣君の説教だけで、二時間はかかる。それを考えると、今から胃が痛くなつてきた。

「とりあえず、発砲はしていないうだろな？ 証拠が残るやつを揉み消すのは面倒だぞ」苦々しい顔付きの桜田さんを見て、ふと思いついた。

そういうえば私、まだ持ってるよね？ あの奪った拳銃。

「あ、そっそ。それなんだけど……」

ペラリ、とドレスのスリットを捲つたところで、東条さんと桜田さんがギョッとしたようすに目を瞠つた。あれ？

途端に、顔を真っ赤にした桜田さんが叫び声をあげた。

「う、麗ーー！ 婦女子が男の前でスカートを捲るな!! お前には恥じらいってものがないのか!?」

一応周りに聞こえないようにボリュームを落としてはいるものの、いきなり雷を落とされて、無理やり裾から手を外される。

「え？ いやあの違うよ!? そつじやなくて、これ！ この拳銃!!」

慌てて言いながら桜田さんの手を振り払い、私は太もものストッキングに差し込んでいた小型の銃を取り出した。そしてそれを、桜田さんに手渡す。「瞬驚愕」した桜田さんだったが、でもその後、すぐに真剣な顔になり、じつと銃を見つめていた。その鋭い眼差しは、いかにも刑事さんつて感じだ。

「わかった。これは俺が預かる。……他にはもうないな？」

「銃？ うん、それ一丁だけだよ」

ハンカチを出して銃を受け取ると、桜田さんは角度を変えつつあちこち眺めていた。

そして黒光りするそれを押収品としてハンカチに包み、懐のポケットに仕舞った。

その時、報道陣に囲まれた鷹臣君と隼人君、朝姫さんが、堂々と歩いて来た。

モデルのような外見の三人が並んで歩く様は、それはそれは見ごたえがある。その中のひとりは、警視庁の有名なアイドル刑事。当然のように記者たちに顔が知られている隼人君は、事情を聞きだそうとするマスコミを集め、かつこうの餌になつてゐる。だけど、そこはさすがの隼人君。取材は全て後で受けるとか何とか言つて、やんわりと笑顔で受け流している。ここでは適当にかわして、おそらく事後の対応は誰かに押し付けるつもりなんだろう。

「麗ちゃん！」

その三人の中で真っ先に私に気づいた朝姫さんが、猛突進してきた。そしてその勢いのまま、思いつきり私に抱き着いてくる。

美女の抱擁は素直に受けとろう。いつでもウエルカムです。

「よかつたわ無事で！ 心配したのよ？ 怪我はない？ 白夜にセクハラされていないい？」

「ご心配おかけしてすみませ……って、へ？」 東条さんに？ いえ、特に……

さらりと最後に、めちゃくちゃ答えにくい質問投げましたよね？

隣で東条さんが渉みのある笑みを浮かべている。朝姫さんは慣れているのか、涼しい

顔でシカトしているが。

その後、鷹臣君と隼人君から説教と小言、そして最後に餡と鞭のようなくらいの言葉をいただいた。締めに、鷹臣君に頭を撫でられた。その後で、ようやく響が姿を現した。

「あれ？ 着替えたの？」

「うん、さすがにあのままじゃね」

疲れきった顔で弱々しくため息をついた弟を、私はギュッと抱きしめた。お姉ちゃんのせいで無茶させてごめんね、という思いを込めて。

改めて、例の黒尽くめのかつこうから、との高校の制服姿に戻った響をしげしげと眺める。ジャケットは着ていない。テロ事件の最中に私が借りて、そして会場のテーブルの下に置いてきたんだよね。きっとまだそこにあるんだろう。けど、回収したところでもう着られないだろうな。ここはひとつ、私が新しい制服を一揃えプレゼントするとしよう。

「怪我はないようだね。よかつた～。響が動いてくれて助かったよ。ありがとう！」

「身体は大丈夫だけど、ハラハラしすぎて心臓がいくつあつても足りないから、無茶するのにはこれつきりにしてね、麗ちゃん」

やつぱり私なのか！

私の背中に回していた腕を解いた響は、何かに気づいたように、ん？ という顔をして私の身体をくるりと反転させた。

「麗ちゃん、首の後ろで結んでるリボン、解けかけてるよ」

「え？ ホント？」

響は本当にそういうことによく気がつく。急いで緩くなつていたリボンを結び直してくれている。

「あ、そういえば。さつきの色仕掛け作戦で、一度結び直したんだっけ……」

「む、むぐ！」

いきなり背後にいる響が、慌てたように私の口を手で覆ってきた。  
振り返り、響に抗議の視線を向けると、「麗ちゃん、し！」と耳元で黙るように告げられる。

「一体何……」

その問いは、目の前から漂つてくる妖気のような空氣を感じた瞬間に、どこかへ飛んでいつしまつた。

「色じ……？ 今、何と仰いましたか、麗さん」

静かに、冷やかな怒気を放つてゐる東条さんの顔はいつも通り微笑んでいて麗しい。だが、周りの温度が急激に下がる。その変化に戸惑いながら、私は自分の失態を悟つた。

あれ、もしかしなくとも、今の言葉、口に出てましたか！?

響にこわごわ視線を送ると、こくりとうなずかれる。  
……しまつた。またお説教される！

「お前、なんつー危険な真似を……！」

再び顔を赤く染めながら、怒り出す桜田さん。

「お前の色気なんぞに引っかかる男がいたとは、すげーな。貴重な体験じやねーか。もつと女磨いて、いざつて時に武器になるようにしておけ」

あんまりなアドバイスを鷹臣君がくれる。

三人の反応が違すぎるるので、何て返したらいいか、もはやわからなくなってきた。と、とりあえずこの寒さをどうにかしないと……！ 笑顔なのに何故か怒つてゐる感じがする東条さんを、とにかく宥めなければ。これ以上無茶をしたと思われて、心配されるのは心苦しい。

「あ、あの東条さん。違うんです」

はつきりと『色仕掛け』って言つておきながら、違うも何もないと思うが。

誤魔化すつもりはないけど、何とか誤解だけは解いておきたい。そこまで危険な作戦

何と言つて説明すればいいかあれこれ悩んでいたら。桜田さんがお兄ちゃんモードに

なつて、とくとくとお説教を始めた。

「いいか麗。男は皆、狼なんだぞ！ そんな危険な真似したら、一瞬で食われるぞ」  
眞面目な顔で言つてゐるのに、説得力はない。それは、桜田さんの美少女……もとい美少年顔と、狼とが結びつかないからだろうか。

「ええ、美少年顔の笑ちゃんに言われてもな！」

「誰がエミちゃんだ！ それと俺のことは美青年つて呼べ」

——それはちょっと、無理があるだろう。  
その場の全員が口には出さずに顔に出していいたツッコミに、本人が気づくことはまったくなかつた。

翌日の事情聴取の時間など、大まかな予定を取り決めた後、ようやく帰宅できる空気が流れ始めた。

「響。お前、今夜は俺のところに泊まっていけ」

鷹臣君が唐突にそんなことを言い出した。

「え、僕？ 何で？」

言われた響は、戸惑った表情を浮かべている。確かに、これは何とも珍しいことだ。「ああ、ちょっと確認したいことがあるからな。まあ、明日は日曜だし、別に構わねー

だろ？ 麗」

確認、つて一体何？

気になつたけど、まあ鷹臣君の中で何かが明らかになつたら、教えてくれるだろう。聞くのはその時でいいか。

それでも、いつも俺様で人遣いの荒い鷹臣様なのに、姉の私に許可を求めてくるところは律儀というか、何というか。私の保護者は鷹臣君だけど、響の保護者は私だからか？

いずれにせよ、特に断る理由はない。

「いいんじやない？」

「んじや行くぞ。お前らも帰れよ」

強引でマイペースな従兄に半ば引きずられるように、響が連れて行かれる。二人が車に乗り込んだところまで見届けた後、ふと疑問に思つていたことを誰ともなく尋ねた。

「そういえば、このホテルに泊まっている人たちって、どうなつたの？」  
さすがにこんな事件があつたら、今日ここは使えないだろう。でも宿泊客はいい迷惑だ。  
「それなら大丈夫みたいよ。閉じ込められていた人の中に、ホテル経営者がいて、そこ  
に無料で泊まさせてくれるとか」

朝姫さんが説明してくれた。

すごいな、それ。青い薔薇のパーティって、どんだけセレブが集まっていたんだ？「それじゃ、朝姫さんも？」そちらに移動するんですか？」

朝姫さんは今晚、ここに泊まる予定だったはず。どうするのかな。荷物すら取りに行けないんだし。

そうね……、と考え込む朝姫さんの手を取ったのは、意外にも隼人君だった。

「僕が家まで送るよ。行くよ、朝姫」

「はあ!? ちょ、ちょっと！ 何で私があんたに送られなきやいけないのよ！」

朝姫さんの声に構わず、手を握った隼人君は、そのままどんどん歩き始めた。

え？ 何、それ！ 確か二人は、お見合いで振った者同士だったんじや？

「頼んでない！」という朝姫さんの抗議はあつという間に遠ざかり、すぐに聞こえなく

なった。

思いがけない展開に呆気に取られながら、私は二人の姿を見送った。

いつの間にあの二人は仲よくなつたの？

「ああ！ 古紫のやつ、ひとりだけ逃げやがったな……！」

まだまだ仕事が溜まっているらしい桜田さんが、苦々しいため息をつく。彼はその後

すぐ、部下に呼ばれて現場に戻つてしまつた。刑事さんは大変だ。

「それでは私たちも帰りましょうか」

「へ？」

当然のように東条さんに手を取られて、エスコートされる。

向かつた先は、すっかり見慣れた東条さんの黒い高級車。

助手席に座らされ、車が発車する。車はうちとは反対方向に走つてゐる。一体どこ

へ……？

聞かされた答えに、私は自分の耳を疑つた。

「……へ？」

東条さんの家に？

え、何で！？

慌てる私を余所に、前を向いてハンドルを握つてゐる東条さんは、爽やかに告げた。

「私はもう、我慢も遠慮もしませんので」

——覚悟してくださいね？

最後に届いたその言葉は、まるで幻聴のように響いてきて……。私の思考を、しばら  
く奪つていった。

## 〈心の準備〉

——東条さんと二人きりの車の中。

「響君がいないのに、麗さんをひとりにさせるわけにはいきません。特に今夜はいろいろありましたから」

先ほど鷹臣君が響を自宅に泊めると言つて引っ張つて行つたので、確かに今夜は私ひとりだ。それを東条さんは気にしてくれたらしい。いろいろあつた日の夜を、誰もいないうちで過ごさせるのは、気が引けたのかもしれない。どんだけ東条さんは私に優しいのか。どんだけ私を甘やかすのか。

「でも、それって迷惑じゃありません？ 突然お邪魔したりして……」

遠慮がちに尋ねると、東条さんはあつさりと否定した。

「むしろ私が気になつて眠れません。麗さんは目を離してはダメな人だと、今日改めて実感させられました」

おおう、ここでも危なつかしい人扱いか！ さすがに耳が痛い。

「私はもう、あなたを手放すつもりはありませんから」

え？

先ほど我慢や遠慮という言葉を聞いた時にも一瞬疑問符が浮かんだが、今回の「手放さない」発言に、改めてドキッとした。

私が落ち着かないのに対して、東条さんは穏やかな表情を浮かべるだけだった。

途中でコンビニに寄つて必要なものを揃えたいと頼んだけど、「全て間に合つてます」と意味不明な返事をされた。

いきなりお泊まりだなんて言われても、クレンジングや化粧水、歯ブラシや新しい下着、はたまた着替えなんて、パーティー仕様の今の私が持つているはずがない。

ホテルのクローケに預けてある上着やバッグは、後日受け取りに行くことになつていい。だから「間に合つてる」と言われても……なのだが。

でもまあ、前にも一度泊まつたことあるし、一泊だけなら平気……か？

男性の家に、しかも好きだと自覚した相手の家に泊まるなんて、緊張しないわけがない。しかし、既にお泊まり経験済みつてところが、ある意味恐ろしい。自覚前にお泊まりつて、私どんだけ大胆だつたの！

けど、東条さんは厚意で私を泊めてくれると言つてているのだし。それにきっと、以前

お借りした客間を使わせてくれるのだろう。だから、大丈夫かな？ そうやって、団々しく甘えてしまう自分がずるいな、なんて思う。でも、いろいろあって今夜、少しでも長く好きな人の傍にいられるなら、そうしたい。自分自身、団太いという自覚はあるけど、今は東条さんの優しさに甘えたいと思った。

すっかり見慣れた東条さんのマンションに到着する。

既に二度目——いや、記憶にない事故も含めると三度目——の東条さんのご自宅は、やはりため息が出るほど豪華で広い。

ものが少ないので、決して無機質ではない、ちゃんと生活感のある温かい空間。収納スペースがたくさんあるからといって、この雰囲気は出ないと思う。どうやったらこんなにすっきりして、でも殺風景じゃないお部屋が完成するんだろう。促されるままに、お風呂をお借りする羽目になる。若干戸惑いつつも、やっぱりここでお言葉に甘えることにした。汗と埃を洗い流した後、ジャグジー付きのバスタブに沈んでゆっくりと疲れを癒す。

好きな人の家でお風呂に入っているこの状況……。冷静に考えたら、かなりすごいこととしているのか、自分。

「って、深く考えちゃダメだよ！ 東条さんを直視できなくなるから!!」

自分の気持ちを改めて認識したら、東条さんと目を合わせられるか自信がない。この顔の火照り。お風呂に浸かって血行がよくなつたからっていう理由で通じるかな……なんてことを考えながら、私は浴室を出た。

バスルームから出た私は、東条さんから事前に渡されていた着替え一式を纏う。新品の下着と、パイル地のような、パジャマというか室内着。薄いピンクの水玉柄で、上はチュニック丈。胸元にはリボンのアクセントがついている。下のズボンは裾がきゅっと絞られていて、ここではアクセントにフリルがある。下のズボンは裾がきゅっと絞られていて、ここではアクセントにフリルがある。めちゃくちや私好みで可愛いけど……。何故、東条さんがこんなものを持っているんだろう。もしかして、朝姫さんの忘れ物、とか？

「うん、朝姫さんのを貸してくれたんだよね、多分」

勢いで来ちゃってお風呂までお借りして。つい数時間前までは、「告白する！」なんて意気込んでたけど。こうして非日常から現実に戻つたら、冷静になつたせいか、何も今告白しなくともいいんじゃないか、なんてためらいが生まれてくる。

もし私が気持ちを伝えることで、東条さんとの、この関係が壊れちゃつたら……

これががずるい考え方だつてことはわかつてゐる。だけど、今の状態はとっても居心地がよくて。それが崩れることを考えると、どうしても慎重になつてしまふ。

ダメだな、私。あんなに会いたくて、会つたら気持ちを告げるつて決めていたはずなのに、いざとなると怖気づくなんて。K君に知られたらきっと呆れられる。あの時の潔さや度胸はどこにいったんだ？ と鼻で笑われそうだ。

それに、さつきも思つたけど……東条さんの気持ちがわからない。私を一体どういうふうに見てくれているのか。

勢いよく髪を乾かしながら、考え込んでしまう。

やつぱり、妹のよう見られてゐるのかな……？

いくら考へても答えの出ないモヤモヤを抱えたまま、私はドライヤーのスイッチを切つた。

東条さんの気持ちをしつかり聞いてみたい。だけど、それはもう少し時期を見てからに……

居心地のいい距離感のまま、しばらく好きな人の傍にいさせて欲しい。

私はそんなことを願つた。

お風呂から出ると、ソファに腰掛けている東条さんと目が合つた。

彼も着替えを済ませたらしい。部屋着なのだろうか。ゆつたりとした白いカットソーに黒いジーンズを纏つてゐる。

カジュアルでラフな服装なのに、どうしようもないほど眩しく見えてしまう。

加速し続けるこの感情はなかなか重症だ。

東条さんはソファから立ち上がり、何か飲まないかと尋ねてきた。

「じゃあ、お水を頂いてもいいですか？」

「ええ、もちろんです」

冷蔵庫の中から冷えたミネラルウォーターのボトルを取り出し、しかもちゃんと蓋を開けてから渡してくれた。

蓋にまで気が回るなんて、東条さんの紳士っぷりはここでも健在か。

ゆっくりとお水を飲んで一息つく。ほっとしたところで、ふと気づいた。

ものすつごくいまさらだけど……私、今スッピンなんですが！

あんまり顔を見られるのは困る！

そそくさと踵を返して距離を置こうとしたら、東条さんに手を取られた。飲んでいた水のボトルを取り上げられ、キッチンのカウンターに置かれる。そして、緩く抱きしめられた。

微かに鼻腔をくすぐるシャンプーの香りから、東条さんもシャワーを浴びたことがわ

かつた。バスルーム、他にもあるんだ。まあ、そりやそりや。だってこの広さだし。——つて、そうじやなくて！

突然の抱擁に動搖するなど言う方が無茶。身じろぎ一つできずに、硬直してしまった。

パジャマ姿で密着している上、しかもお風呂上がりなのも相まって、体温がじわっと上がる。自分の顔がひどく熱いことがわかる。

私の動搖に気づいているのかないのか。東条さんはそのままの体勢で、声を掛けてきた。

「麗さん。怖い思いをさせてすみません」

「え？」

何で東条さんが謝るの？

胸にうずめていた顔を反射的に上げると、苦い表情を浮かべる東条さんが、私の頭を抱きしめて再びその広い胸の中に囲い込んだ。

「傍にいらぬかったことで、あなたに無茶をさせました。怖い思いもたくさんさせてしまいました。ひとりでテロリストに立ち向かうなんて真似、普通の人にはできません。しかも麗さんは女性で、こんなに小さくてか弱く、守られるべき立場であるはずなのに」 苦さを含んだ掠れ声が、私の鼓膜を震わせる。

その声色から、本当に彼を心配させてしまったのだと実感した。

胸がぎゅっと絞られたように、ひどく苦しい。たとえ最後の「小さくてか弱く、守らるべき立場であるはず」って言葉が自分に当てはまるかどうか、疑問に思つても。「私は何もできませんでした。これほど自分の無力さを嘆いたことはありません」

——違う。

抱きしめられている頭を動かして、私は東条さんの顔を見上げた。

「違います。東条さんは私を助けてくれましたよ？ 電話で話せただけで勇気がもらえます。頑張ろうっていう力をくれたんです。そしてちゃんと迎えに来てくれたじやないです。何かできない人なんかじゃないです」

ちょっと、いや、かなりタイミングが悪い登場ではあつたけど……  
あの件について触れてこないなら、こちらもその話を振るのはよそう。訊かれても困るし。

「麗さんが芯の強い女性なのはわかっています。でも、ここには私しかいません。ですから、いつまでも気を張り詰めていなくてもいいんですよ？」

頭をゆっくりと撫でる東条さんの手が、優しくて、気持ちよくて、暖かくて。

弱音を吐いてもいい。甘えてもいい。そう言われた気がして——  
ピンと張った糸が緩んだ。私の目の奥が熱くなる。  
ポロリと零れた涙が一筋、頬を伝つた。



腕の中で、俯いて静かに泣き始めた麗を、白夜は沈痛な面持ちで抱きしめた。

自分の肩に届くくらいの背丈の麗の身体は、抱きしめると女性特有の丸みが感じられる。と同時に、肩の細さに驚いた。

ぎゅっと力を込めたら折れてしまうんじゃないかと不安になるほど、男の自分とは身体のつくりが違うのだ。

柔らかく華奢で、大の男に立ち向かう屈強さとは無縁の女性。

なのに、そんな麗のいざという時の度胸のよさを、今日は改めて見せ付けられた。

怖いとただ泣いて、守られる存在ではいってくれない。

震えて何もできない役立たずには育てていらない、と鷹臣が言い放った言葉が蘇った。

それでも、白夜にはわかる。度胸や根性や勇気があつても、麗はやはり、守られる側の女性なのだ。

おそらく、彼女は恐怖を感じる暇がなかつたのだろう。

ピンと張り詰めた糸が切れたら動きなくなると、本能的に悟っていたのかもしれない。

あの場で交渉材料を持っていたのは、確かに麗だった。思いがけず、奴らの思惑を知り、

情報を持った。それを効果的に使うにはどうしたらいいかと、散々悩んだことだらう。人質をひとりでも多く解放するために。誰も怪我をせず無事でいるために。  
この小さな背中に、どれだけの人が救われたことか。この小さな背に庇われて先に脱出した人々は、どんな思いで非常階段を下りて、自分たちに助けを求めることがあつた。

麗は、生き物が本能的に警戒する炎を使って、敵に立ち向かつたという。

解放された人質たちが興奮気味に語つていたのを、白夜は小耳に挟んだ。

本音を言えば、この目でその姿を見たかった。

彼女を危険にさらすわけにはいかないと考えている自分がいる。しかし、瞳に強烈な意思を秘めて前を向いている彼女の姿を、この目に焼き付けたかったと思っている自分もいる。

赤いドレスの裾が焦げるのも構わず、凛とした態度で炎を掲げている彼女の姿を想像する。

扉を開けた瞬間に視界に飛び込んできたのは、突進してきた男に踵落としを食らわす麗の勇ましい姿。

その決定的瞬間に、その場にいた刑事を含めた全員の視線が、彼女に釘付けになつた。スリットから覗いた扇情的な足で床に転がる男を踏みつけていた彼女は、決してか弱いとは言えなかつた。

ボロボロのドレスを纏<sup>まとい</sup>て髪を乱した彼女は、目を奪われるほどきれいで……

正直言つて、惚れ直した。

しかし、言葉を失ったままその場に立ち尽くしていた時に、妙なりクエストに答えた麗の台詞で我に返ったのだ。

普段の彼女からは絶対に出てこないはずの代物<sup>しきもの</sup>。結果、目も耳も、自分の何もかもが彼女に奪われた。

そして、自分に気づいた彼女が、狼狽<sup>ろうぱい</sup>する姿がひどく愛しかつた。抱きしめたい衝動のまま、彼女を引き寄せて腕の中に閉じ込めることができた時、ようやく心の底から安堵したのだ。

泣き言も弱音も吐かない彼女を、どうやつて慰めたらしいのだろうか。

初めから、ひとりきりの自宅に帰らせるつもりなどなかつた。もしひとりで麗を帰したら。きっと彼女は気持ちが落ち着いた頃に、ひとりきりで涙を流すはずだ。

嗚咽<sup>おえい</sup>をこらえて身体を震わせ、あの時味わった恐怖を思い出して……

彼女が静寂の中でのひとり孤独に泣いているなど、耐えられない。

麗は、周りに人がいたら自分の弱さを見せない。しかし、あの時彼女を抱きしめた瞬間。彼女は自分を抱きしめ返した。それがほんの少しでも自分を求めていたからであつ

もう大丈夫だと伝えて、彼女を安心させて、抱きしめる。  
たっぷり泣いてしまえばいい。自分はそのために、彼女の傍にいるのだから……



たのなら、弱さを見せてくれるのではないか。

彼女を存分に甘やかしたい。怖かつたと泣いている彼女を慰めたい。

ひとりで恐怖を味わうことなど、二度とさせない。

もう大丈夫だと伝えて、彼女を安心させて、抱きしめる。

たっぷり泣いてしまえばいい。自分はそのために、彼女の傍にいるのだから……

私の目から一度あふれ始めた涙は、一向に止まる気配を見せなかつた。水分が枯渇するんじやないかと自分で心配になるほど、次から次へと大粒の涙が零れ落ちていく。何が何だかわからない。

ただ、本当は怖かつた。でもそれをずっと我慢していた――

私は今、そのことに初めて気づいたのだ。そして、気が緩んでしまつた。

会場ではとにかく必死で、泣いてなんかいられなかつた。そんな暇があるんなら、全員が助かる方法を考えることが大切だつたから。

あの時は、何か、変なアドレナリンが出ていたのかもしれない。とにかく何とかしようと無茶をしまくつてたし。

## 立ち読みサンプルはここまで